

精神に色どられたものである。ところがスポーツということばがルースに使われていて、この二つを混同している。その結果は、スポーツマンシップの中にスポーツ独自のもの以外の多くの美德をとり込んで来ることに抵抗し切れなくなる。そして道徳的完成の具体的な方法にされたり、片方では道徳的頹廢を防ぐ方便にされたりするようなことが起ってくる。

スポーツに要求されるスポーツマンシップの中心の徳性は寛大であるが、これをアスレティクスにも適用しようとするのは間違いであり、アスレティクスにおける競争の意味をそのままスポーツにおける競争と同一視するのも明らかに間違いである。

ところで今日学校体育で楽しい体育というとき、スポーツ教材は勝った者は楽しいが負けた者は楽しくないから、みんなが楽しめる方法を考えるという。たしかにその通りだが何だかじっくりしない肌触りを感じることが

あるが、あるいはそれがわれわれの意識の中で、スポーツとアスレティクスの目的の本質的な区別を曖昧にしていることに原因するのかも知れないなどと思ってみる。スポーツに競争が使われるのは楽しくするために導入されているのであり、競争という形をとっているが本質は協同であり、自分も相手も楽しくするためにそれを行っているのだから、そういうことを教えるのが教育であろうと思う。それを人工的な細工をあまり施しすぎて、競争をコントロールしすぎると、却って不自然なものになってしまわないかと思うのである。

言うは易く行なうは難しで、スポーツのほんたによいところを教えることの出来る人は、ほんとのスポーツマンであろう。あるいは哲学的によくできている人であろう。そういう意味で哲学は実践に影響を及ぼすから、スポーツと身体哲学の勉強をして行きたいと考えている。

* 学生スポーツとスポーツ産業 *

札幌大学 倉島 武徳

私がポートランド大学にバスケットボールコーチングの研修で滞在したのは、昨年10月中旬から今年の4月上旬までの約6カ月間のことである。その私に“曲り角”に留学記を投稿せよという編集氏からの依頼に途惑いながら筆をとっているところである。まず第1に“曲り角”とは畑違いの勉強に行ったこと、第2に広いアメリカでただ1つの大学の1人のコーチについて短期間勉強させてもらっただけで、かなり表面的なことしか書けないことをお断りしておく必要がある。

ポートランド大学はオレゴン州ポートランド市に所在する学生数2,800名ほどの小規模なカソリック系の私立大学である。従って、大学が公認して行うインターカレッジ・アスレティック・クラブは男子7種目、女子

6種目に限定し、それぞれに専任のコーチ・アシスタントコーチを配置し全面的にバックアップしている。私は男子のヘッドコーチであるジャック・アヴィーナ氏に教を請うたのであるが、氏は永い間、高等学校の教師を勤める傍ら同校のバスケットボールコーチとして実績をあげ、1971年から現職のポートランド大学バスケットボールチームのヘッドコーチを勤めている人である。アメリカにおいて永年同一の大学でヘッドコーチを勤めるには、それなりの理由がある。アヴィーナ氏は高等学校の教師をしていた経験が十分に活かされた教育者であると同時に、人間性豊かな機微に富んだ人物である。このことが13年間同一の大学でヘッドコーチを勤められる重要なポイントであっただろうと思われる。

ポートランド大学の男子バスケットボールはNCAAのディヴィジョンIに所属しているが、学校規模が小さいため大規模校より条件の悪いスカラシップで、あまり優秀な選手を獲得できないのが現状である。コーチングスタッフはこの選手たちにプレイ上の指導は勿論のこと学習・生活面でのアドバイスまでしなければならないのである。特に学習上では2学期にわたって基準以下の成績をとると学校をキックアウトされるという厳しい環境の中で育てなければならないことを、わが国の学生スポーツ界と比較すると相当の差を感じるものである。コーチには大別して2通りのタイプが考えられるが1つは教育者の立場をとる者、他方は勝利請負師の立場をとる者で、どちらが良い悪いではなく、私達も今一度このことについて思い直してみてもどうか。

一方、バスケットボールに関してアヴィーナ氏は選手のメンタルな面の把握にも力を入れている。と言うのも選手に能力がないため、練習中や試合中におこる特異な状態に対処するためである。このことに関してアドバイスするのがスポーツコンサルタント会社で、アメリカではこのような職業が成立するようで

ある。このコンサルタント会社はシーズン開幕早々にチームの必要なデータ(性格・行動・目標など)の収集を行い、コンピューターにファイルし、各ゲーム毎に処理された資料をヘッドコーチに提出するシステムになっている。このレポートにはコンサルタントとしてのコメントもついてきて、それをコーチは日常観察とあわせて指導の資料にしているのである。大規模な大学ではチームスタッフも大勢いて担当分野も決っていて、選手のコンディションや学業成績や生活面での把握をしているようであるが、小人数のスタッフではやはり手不足の面を外注でカバーしているがために産業として成立する余地があるのではないだろうか。

アメリカにおける学生スポーツに関して大学が何故そのように資本投資するのかについては「学問研究とスポーツ・文化活動およびボランティア活動が三位一体でなければ大学ではない」(ポートランド大学学長談)という思想に貫かれているからであろう。わが国の知育偏重教育と比べた時、この識見の相異がどこからあらわれるのか、あらためて国情の相異を認識させられた次第である。

* 東北地区分科会の活動状況 *

事務局より上記のテーマでの原稿依頼があった。しかし、実は地区としてのまとまった分科会の研究活動は行われておらず、またたかだか数年の研究歴しか有さない若輩者の私には、東北6県にちらばっておられる先生方の研究動向を概括するだけの力量もない。そのような訳で一旦は事務局の依頼を断るつもりでいた。しかし、この機会に東北地方の分科会メンバーの問題関心領域だけでもまとめ、その資料をメンバーの方々にお返しできれば、むしろそのことが今後の東北地方の分科会と

福島大学 工藤孝幾
しての研究活動の手掛りにでもなるのかと思
い、逆に積極的に東北地方の諸先生方に対す
る調査活動を企画したわけである。ところが
そこで初めて現在の分科会名簿からする限り、
この地方のメンバーは私を含めて3名しかい
ないことがわかったのである。こうして私の
企画は完全に頓挫してしまった。とにかく東
北地区の分科会活動というのは以上の事実経
過が示すところであり、そのことをまずは報
告する次第である。その上で私に与えられた
字数の残りに、まことに勝手ながらこのよう

な状況の地区に住む一研究者としての研究上の悩みや研究会活動の有りように関する私見を述べさせていただくこととする。

当然のことながら、近隣に専門分野を同じくする研究者がいないという中でやって行くとする時、最も不足するのが日常的な生きた情報交換である。従って、何か新しい事に取組もうとする時、情報収集の小廻りがきかず、自分だけのまことに不十分な文献研究の成果にのみたよらざるを得ない。だから自分がやろうとしていることは既にやり尽された時代遅れのものではないかという不安が常につきまとう。現在、国立大学の図書館を中心とした学術情報体制の整備の検討が進められているが、その体制が今後有機的に機能することのメリットは、特にこうした地方に住む我々にとってきわめて大きいといえよう。学術情報体制の整備の仕方は現実のさまざまな制約条件を勘案すれば、当面かなり限られたものにならざるを得ないことが予想されるが、上記のような視点から個人的要望を述べるなら、少くとも国内の最新の公刊論文の目録・所在情報及び索引・抄録情報が逐次もれなくデータベースに入力されること、また平行してファクシミリ等の大規模情報伝送システムの整備により簡便な文献入手を可能ならしめること、の2点は是非とも実現が望まれるところである。

研究上の悩みのすべてを贅こうとすれば字数がいくらあっても書き足りないし、線言のみをいくら要領良く書き綴っても気が滅入るばかりなので、最後に研究活動のありようという前向きの内容について一点だけ私見を述べさせていただく。

それは、東北地方のように極端に分科会メンバーが少ない所では、専門分科会別の地方のまとまりを今後どうするかという検討は不自然であり、さほど生産的とも思えないという点である。テーマが限定されていない時に

少人数で研究会を組むとどうしても「このメンバーなら何が出来る」といったいわばメンバーによって研究内容が決まるという形式にならざるを得ない場合が多い。私は常々、問題があってそれを解決するために必要なスタッフが決まってくるという研究会でなければならないと思っている。そのような研究会を実現するためには、東北地方ではむしろ専門分科会別のまとまりではなく、さし迫った体育の今日的諸問題に関する問題別のまとまりが今後指向されるべきであろう。このようなあり方はひとり東北地方のみに要請されるものではなく、むしろ地方を問わず既に現実には活発に行われていることであろう。その意味で以上のことは東北地方だからやれる、というより、東北地方でもやれる有り方とでもいえようか。幸い東北のいくつかの大学から専門性を乗り越えた研究会発足への声もささやかれている。今後それらのエネルギーをどういうやり方で形のあるものにしていくかが今問われているように思う。

新 入 会 員 募 集 案 内

体育学会体育心理学専門分科会では、例年40～70件の一般研究発表が行なわれ、今年も50件が予定されています。その中には新しい発表者も数多く見られますが、分科会への加入率は必ずしも高くありません。この会の存在や加入の仕方を知らない人が多いようですので、会員諸氏より声を掛けていただけませんでしょうか。加入はいつでも構いません。加入費500円と年会費500円で受けつけます。尚、シンポジウム終了後に総会を開催しますので、その折に申し込んでいただいても結構です。

幼児の樹木画と体格・運動能力

近畿大学 津田 忠雄

描画表現が幼児の心身の発達指標となることは、多くの研究者によって報告されている。すなわち、幼児の描画表現は、岩井も述べるように、①言語表現よりも表現行為が先行する。②言語よりも表現過程が複雑でなく、表現が直截的である。③心身の状態がより未分化な形で、自動的な表現が行われやすい。といった点から、心身の状態が直接に投影しやすいと考えられ、また、複雑化、個性化が著しい小学校高学年以上の子どもに比して、知覚されるものが単純であり、各年齢に応じて、パターン化されやすいといった特徴が見いだされる。このようなことから、幼児の描画表現は、彼らの発達の状態、過程を認知するひとつの指標になると考えられる。筆者もまた、心理治療場面で、表現される描画に投影される子どもたちの心身の発達状態の確かさにしばしば驚かされる。

本研究は、幼児が描画に表現した心身の発達状態を、体格・運動能力といった身体的状況と比較・検討することにより、彼らの心と身体との関係を明らかにするものである。今回は、「樹」というテーマを与え、そこに表現された幼児の心身の発達状態と、体格（身長・体重）・運動能力（25m走・ボール投・立幅跳び）と比較することにより、描画表現と身体的状況との関係を明らかにせんとしたものである。樹は、生命の樹（Lebensbaum）というように、生長するものの象徴的、普遍的イメージをもつものであり、また、金盛らの報告にあるように、樹の大きさ、幹の太さが、身体機能、運動機能の発達に関連すると考えられ、樹が有する「身体性」に注目す

ることができる。

このような視点に立って、年長児 100名に樹木画と体格・運動能力測定を実施し、さらに、樹木画を、全体像、幹、枝、色彩等から分析し、その発達状態から、成長群（11名）未成長群（11名）を抽出した。（表1）

成長群において、全体の平均を上まわる項目として、月齢・身長・立幅跳であり、未成長群において、全体の平均を下まわる項目として、月齢・身長・体重・立幅跳をあげることができる。すなわち、樹木画の発達状態は、月齢（発達期間）あるいは身長の発育、また技術の影響が比較的少ないと考えられる立幅跳と関連があることが示唆され、比較的、文化・社会（技術の獲得も含む）の影響が加わる項目については、関連がないと考えられる。

表1 樹木画と体格・運動能力との比較

| 項目 | 全体群 | | 全体 | 成長群 | 未成長群 |
|------|-----|---------|------------------|------------------|------------------|
| | 単位 | M・SD | N=100 | N=11 | N=11 |
| 月 齢 | 月 | M SD | 70.10 3.39 | 71.27 4.05 | 68.81 3.81 |
| 身 長 | cm | M SD | 111.29 4.72 | 111.53 3.50 | 107.88 4.01 |
| 体 重 | Kg | M SD | 19.38 2.51 | 19.25 1.53 | 18.13 1.88 |
| 25m走 | 秒 | M SD | 6.41 0.49 | 6.54 0.55 | 6.33 0.42 |
| ボール投 | cm | M SD | 605.46 222.77 | 614.54 262.67 | 632.90 146.55 |
| 立幅跳 | cm | M SD | 102.15 15.04 | 104.36 23.50 | 97.90 10.88 |

討議において、サンプル数の問題、体格・運動能力からの検討、樹木画の詳細な分析、運動能力の再検討等、多くの助言を頂き、今後の課題として、これらをひとつひとつ解決しなければならないであろう。（1月20日）

スポーツにおける技能上達と勝利達成条件

～大学ラグビーについて～

大阪教育大学体育専攻学生 岡田 圭司

どのようなスポーツにおいても技能が上達し、試合で勝利をおさめるために必要な様々な条件があり、特にラグビーのように多人数の協同を前提とする集団スポーツでは個人種目と異なる条件が必要と思われる。又、ラグビーは格闘球技と称されるように、身体接触の許された球技であり、その点でも他の種目とは、異なった条件が考えられる。

そこで本研究は、ラグビーにおける技能上達と勝利達成条件を明らかにするために、ラグビーに必要と考えられる条件を個人的・集団的・両側面からとらえた質問票を作成し、学生選手権優勝校を含む12大学計304名を対象として調査を行なった後、因子分析法を適用して検討を試みた。

その結果、因子寄与率・個人41.3%、集団45.4%の下で個人に関する8因子、集団に関する6因子を決定した。個人的条件については、ラグビーに必要な競技能力(athletic ability)を備え、プレーに対する自信の強さを表わす第1「自信A」因子をはじめ、第2「意欲」、第3「馬力」、第4「闘志」、第5「実存性」、第6「自信M(general motor ability)」、第7「意外性」、第8「余裕」の8因子、集団的条件については、多彩な攻撃を駆使でき、自チームの戦力アップを必要と考えていることを表わす第1「戦力

強化」因子をはじめ、第2「創意・連滞」、第3「BK充実」、第4「FW充実」、第5「興奮容認」、第6「練習徹底」の6因子が解釈命名された。さらに、競技力をはじめとする変動因別の意識水準を明らかにするために行なった1or2要因分散分析の結果から、個人的条件の闘志、実存性、自信M、余裕の4因子に関しては、強さによる差は認められず、ポジションや経験年数の違いが現われた。これは、技能上達や勝利達成に対して、これらの因子が無関係であることを示すものではなく、ポジション差に示されているように、強いチームを作るための間接的条件として作用しているものと考えられる。

このことを踏まえて、ラグビーが上達し、試合で勝利をおさめるための条件を考えると、個人レベルでは、①一般的運動能力を含む競技能力に対する自信を裏づけとして、②競技遂行に必要なエネルギー発現力(意欲、闘志、馬力)と③危機場面での適応力(意外性、余裕、実存性)が要求され、チームレベルでは、④FWとBKのバランスのとれた戦力アップと⑤チームワークに基づく互いの創意工夫及び⑥一見冷静ではあっても、選手自身は夢中でプレーする興奮性の計6点が要求されるといえよう。

(3月2日)

スポーツにおける技能上達と勝利達成条件

～女子バレーボールについて～

大阪教育大学体育専攻学生 有田 由美

大型計算機の常用化が促進されて以来、かつては一生の課題だった研究テーマも、短期日に完了可能となった。たとえば、作業容量40キロバイトの計機で9時間を要した計算

量も、京都大学との電話回線開通にともなって、CPU-time僅か3秒という経験がある。ちなみに、これを手計算によって完遂したならば数10年が必要とされよう。

大阪教育大学体育学科の修論・卒論における大型計算機利用者は過去5年間に20名を越え、とくに、スポーツ・体育事象に関する「人の意識構造」の分析に力を発揮してきた。当然のことながら、帰納的思考の帰結には方法論の厳正な使用が前提であり、安易な取り組みは危険であるが、先行研究の利点を生かし、欠点を補う姿勢があれば、大きな進歩が期待される。

本研究は、すでに実施された一連の、ネット種目スポーツに関する因子分析的研究（昭和55年：岩谷久子・卓球選手のスポーツ適性、昭和56年：築田理丘・バドミントン選手の精神的特徴、昭和57年：森田ひろ子・軟式庭球選手の意識構造）を参照して、女子バレーボールを取り上げた。質問票作成手続きは、先年度の森田と同一手法をとり、専門月刊誌「月刊バレーボール」1年分12冊から“バレーボールの技術上達と勝利達成条件”に関連した表現語彙3882語を収集した後、男女大学排球部員25名によって分類項目と疑問語彙の組み換え、および代表語彙の選定を行なった。この折、集団競技としてのバレーボールの特質を考慮して、質問票は個人的条件86項目、集団的条件75項目の2区分別5段階尺度形式の回答法を採用した。使用した因子分析技法は先行研究を踏襲し、特別に進歩した点はなかった。因子寄与率は個人的条件35.1%、集団的条件32.7%であるが、明確に解釈可能な8因子と5因子解をもって最終解とした。

すなわち、自信A：排球に必要な競技力に秀れている、向上心、負けん気、外向性、環境因、開き直り、愛好心、自信S：サーブに対する自信の8因子が個人的条件として、疑集力、攻撃力、セッターに対する信頼、克服力、リーダーに対する信頼の5因子が集団的条件として解釈・命名された。

因子スコアの変動とも併せて、女子バレー

ボールにおいて勝利を求める場合、①身体的資質や環境条件に恵まれているばかりでなく、②技術習得の基礎となる自己の競技能力に対する自信と、③目的へ向かってエネルギーを集中する時に欠かせない心理的性向（愛好心、向上心、外向性、負けん気、開き直り）を高い水準に維持する必要がある、それらの個人的問題解決のほかに、④チームプレイの中心であるセッターや指導者に対する信頼、⑤試合を有利に進めたり練習率を高めるために不可欠なチーム力（疑集力、攻撃力、克服力）を養うことの大切さが強調された。

本研究は、先述した一連の研究と同様に、帰納的思考を優先させて、技能上達なり勝利達成条件を現役選手の意識水準に求めたものである。したがって、示めされた結果を競技文化の全体像から演繹的に眺めると、必ずしも整合性ありといえない面が見受けられる。たとえば、攻撃力因子が抽出されながら、守備力は意識されていない。これは、守備力に関する質問項目が他因子の中に吸収され、独自の因子軸を構成し得なかったためである。現役の目は守備よりも攻撃に注がれやすい。此处から逆説的に、回転レシーブを編み出した大松監督の慧眼を看とることもできるわけであるが、サンプリングに際して監督やコーチを包含すれば、より整合性のある結果が得られる可能性を示しているともいえよう。これらの討論をも踏まえて、質問票に基づく因子分析技法の適用研究は、①質問項目の論理的精選、②サンプリングの徹底、③因子分析法各種の多角的実施、によって稔りある結果が約束されるようである。（4月27日）

原稿募集：会員諸氏による自由な投稿を歓迎します。横書400字詰原稿用紙6枚以内、テーマ：随意、切：昭和60年1月末日。

自己中心空間の異方性に関する一考察

大阪体育大学 荒木 雅信・林 信恵・中島 美智子

我々は空間の中に存在し、その中で知覚したり、運動したり、空間に意味を与えたり、イメージを持ったりしている。しかし我々の身体は空間に入り込んでいるために、意識して空間に対処するというよりむしろ、意識されない場合が殆んどである。空間に関する研究は幅広くかつ深い内容を含んでおり、系統的な空間理論の展開は難しいように思われる。人間は運動を通していかに空間を知覚するのか、身体運動と空間はどのように係り合っているのかという問題は、興味深くかつ身体運動の理解にとって多くの示唆を含んでいると思われる。

これまでに、空間に関する概念を示した研究は、Koffka (1935)、鷹野 (1969)、和田 (1969)、石福 (1977)、箱崎 (1980)、松岡 (1982)、Bollnow (1983) 等を挙げることができると思われるが、中でもKoffkaは、「現象的空間、行動空間は、ユークリッドではなく異方性がある」と述べている。さらに、鷹野は、空間知覚の問題の体育的意義を追求し、「体育運動は比較的大きな空間を支配する行動であり、あらゆる瞬間の態勢が外界空間に秩序づけられている」という考え方に立ち、視覚条件と姿勢の問題を実験的に考察している。

種々の空間論をふまえて、筆者らは自己中心空間を次のように定義した。①直立した身体を左右に分節する垂直面と、前後に分節する垂直面の交点を基点として、前後左右に広がる空間、②上半身の運動と、意識的な上下運動を除いた水平運動であるため、上下空間は考慮しない。以上の定義をもとに実験的に自己中心空間の異方性を測定することを試みた。

実験の目的は、被験者に前後左右、夫々の

方向に一定距離(本実験では2m)を歩かせることによって、身体運動を介して知覚される空間の特性をみるものである。仮説は以下のものを設定した。①前後左右は等質ではなく、異方性をもっている。②その異方性は、すべての人に共通した歪みとしてあらわれる。

実験の結果、被験者を4グループに分類できた。第1グループは、前、左が長く、右、後が短いもの。第2グループは、前が長く、左、右、後が短かくかつ左右がほぼ等しいもの。第3グループは、右が長く、左が短い、そして前後がほぼ等しいもの。第4グループは、前後左右がほぼ等しいものであった。

本実験では、実験条件の統制が最も重要な要因となっていることは明らかであり、統制条件の吟味が、今後の課題になると思われる。そこで、以下の点について、さらに検討していく必要があると思われる。①開眼、閉眼条件について。②再生の距離と仕方の妥当性。③側性についての検討。④再現性の問題。⑤弁別域値の問題。⑥筋感覚フィードバック、視覚フィードバック等の各種フィードバックの影響とその作用機序。(6日19日)

体育心理学会会報

「曲り角」

昭和59年7月31日発行

代表 柏原健三

編集 船越正康

連絡先 〒563 池田市城南3-1-1
大阪教育大学池田分校体育学教室
体育心理学専門分科会事務局
電話 0727 (51) 8331 (内) 276